

アオリイカ(白いか) *Sepioteuthis Lessoniana* の養殖試験

伊野波 盛仁、瀬底 正武

アオリイカはいか類中最も美味でありその成長は極めて速いである。

増殖上最も必要な餌は容易にしかも大量に入手できる。

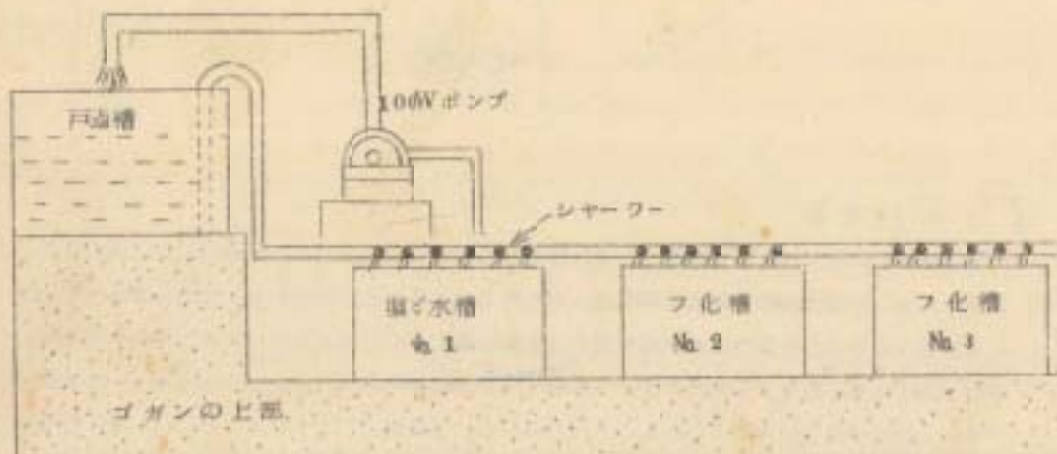
従来においては従来高価に取引されている。以上のことからして養殖対象物として好適なばかりでなく栽培漁業種苗調査とも平行して養殖試験をした。

1 材料と方法

イ) 池上施設に於けるフ化法

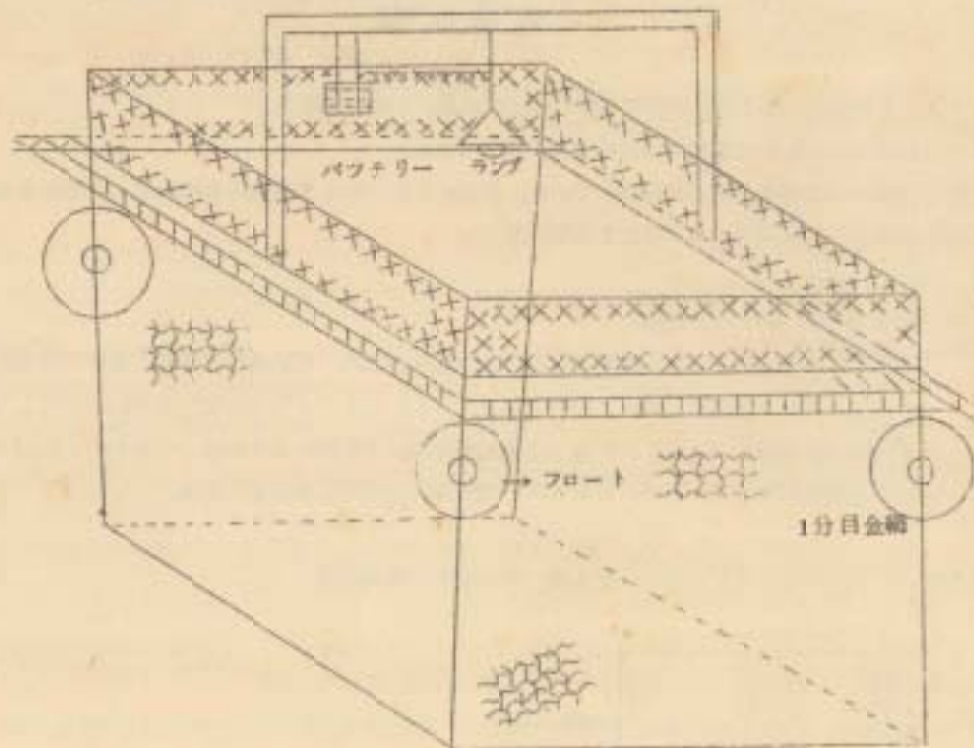
供試魚は羽地白海、塩原、源河一帯の流木の沈下、或はアゴン葉の沈下物に産みつけられたものと知事村の普通海岸干潮時水深1m程のアゴに産みつけられた卵を採集し海水とともにポリ袋に収容運送しオ1図に示すようなフ化水槽 $90 \times 90 \times 60$ cmのポリエチレン製の水槽3槽にて海水試を行なわれているシャワー式注水法を採用しフ化せしめた。

オ1図 — シャワー式注水法



ロ) 活費による方法

オ2図に示されるように $90 \times 90 \times 90$ cmの角材に1分目金属を張り込み四つ槽には塩ビ製フロートを1個ずつ計4個を結着し水面より5.0cm上部に上げ1.2Vバッテリー6Wを設置した。



I 結果と考察

Table-1に示されるように陸上水槽と培養内の卵のフ化（垂下してからの）時間からみるとAは止水 上層水による高水温に慣れさせたものとみることができる。本所実験室内に於ける試験結果よりよくなかつたのは高水温（19.5）によるものと90×90×60cmの飼育水槽に飼料生物（淡水産のミナミテナガエビ *Macrobrachium longipes*, *O. mysis*）の密度が小さいための換能力低下によつたものと考えられる。また餌としてテナガエビの *mysis* を使用することは親えびの採集に多大の労力と時間を要する。よつて餌料としてミナミテナガエビの *mysis* を用いる方法は新念せざるを得なかつた。

イ) 培養による方法

羽地内面、かき器に附属して設置したが相当数が驚くまた浮遊による餌、卵の汚染が著しかつたにも拘らず異状フ化 が少なかつたこと、餌料となる稚魚も充分確認までは至らなかつたが、アミ、仔魚が網内に導入され一部分採取していたことにより静かで経過しが良くしかも陸上からの100V電圧が得られるところならば、この方法を試みる必要がありこれまで行なつてきた陸上施設に於けるよりも有望と見られる。

月日	陸上水槽(A)卵の状態、投餌に関すること
16	
17	
18	
19	
20	卵収容 2,000ヶ
21	
22	
23	
24	異状ヲ出 干熱上げ高湯水と 日中水槽止水時の高水量 34cmになる。
25	急速に稚子が落ち始める。
26	沖合海水を上げてから換水するようにし日中はテント小網を作り水槽の水温上昇を防いで (毎日のようにフセ)
27	
28	友喰い活発
29	2尾投餌(オエビ2尾よりフセした mysis)
30	

※ アナガエビの抱卵量は個体差があり、8000~12,000粒台で平均7500粒台産卵する。

※ 12W灯火における観察

夜間集魚灯に集まる種類(生物相)は主に Plankton 性のもが多く若干は稚魚仔魚の集魚もみられた。またイカ稚子は全長約 2mm の仔魚を捕獲する。だから活簀の金網の網目を大きくするか、あるいはモツ網製の活簀に移せば、大型、仔魚、稚魚の活簀内に移動してくる率が高くなり長居の飼育も可能となり養殖用装置として利用できるのも不可能ではない。唯、缺点是夜間照明はバッテリー 電源に頼っているため、灯力も弱く二日ぐらいしか使用できず

観 察 記 録 (2)

月日	活 養 (B) 卵 の 状 態 , 技 術 に 関 す る 事 件
16	
17	
18	
19	
20	卵 収 容 1,000ヶ
21	
22	
23	
24	
25	
26	暴風の余波を受ける。(垂下卵は針金に絡みついてた)
27	500尾フ化。暴風の余波により相当影響を受ける
28	集魚灯100W点灯(稚魚等餌料生物の集りを試みた。)
29	バッテリー12V6Wを点灯
30	

充電を行う必要を迫まられている点である。夜間照明が容易にできしかも完全性の高い方法を考案する必要がある。

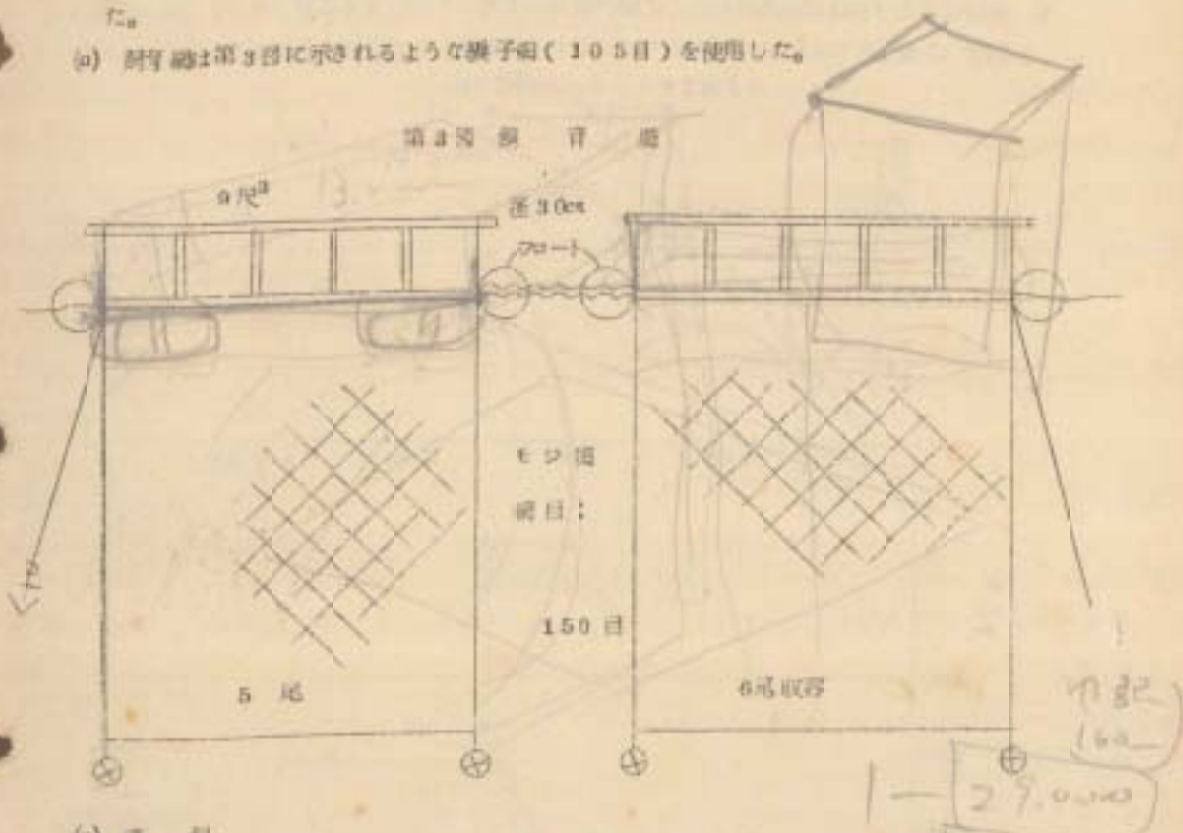
Ⅲ 幼イカの小型網飼育について

(イ) 種 苗 運 搬

船運村南風原の建橋で漁獲されたアオリイカ12尾を本所の試験船カモイ丸(5吨)のデッキに積んだ容積1.5×7.1×4.1mの本箱2ヶに収容し常時ポンプで換水しつつ運んだが途中大シケのため船運から玉環村奥武まで直航できず馬天に一泊せざるを得なかつた結局5尾を小瀬瀬に移し得たに止つたがイカの活魚運送は魚に比べ難しいことには違いないができないことではない。常時換水しつつ船の波況による衝撃をなくする方法:例えば今回の試みは直接デッキ積みにしたのであるが輸送箱を吊下げる方法等は(福岡豊前水試は現在その方法に

よつているようである)よいと考えられる。結局前述した定規から漁獲した5尾と奥武島近くでイカ集で採集した6尾計11尾を第3図のような小羽網に1965年の10月13日~15日わたって収容した。その網の歩張り2尾の中1尾は11月15日友漁いによるものと判断された。

(a) 飼育網は第3図に示されるような網子目(105目)を使用した。



(b) 餌料

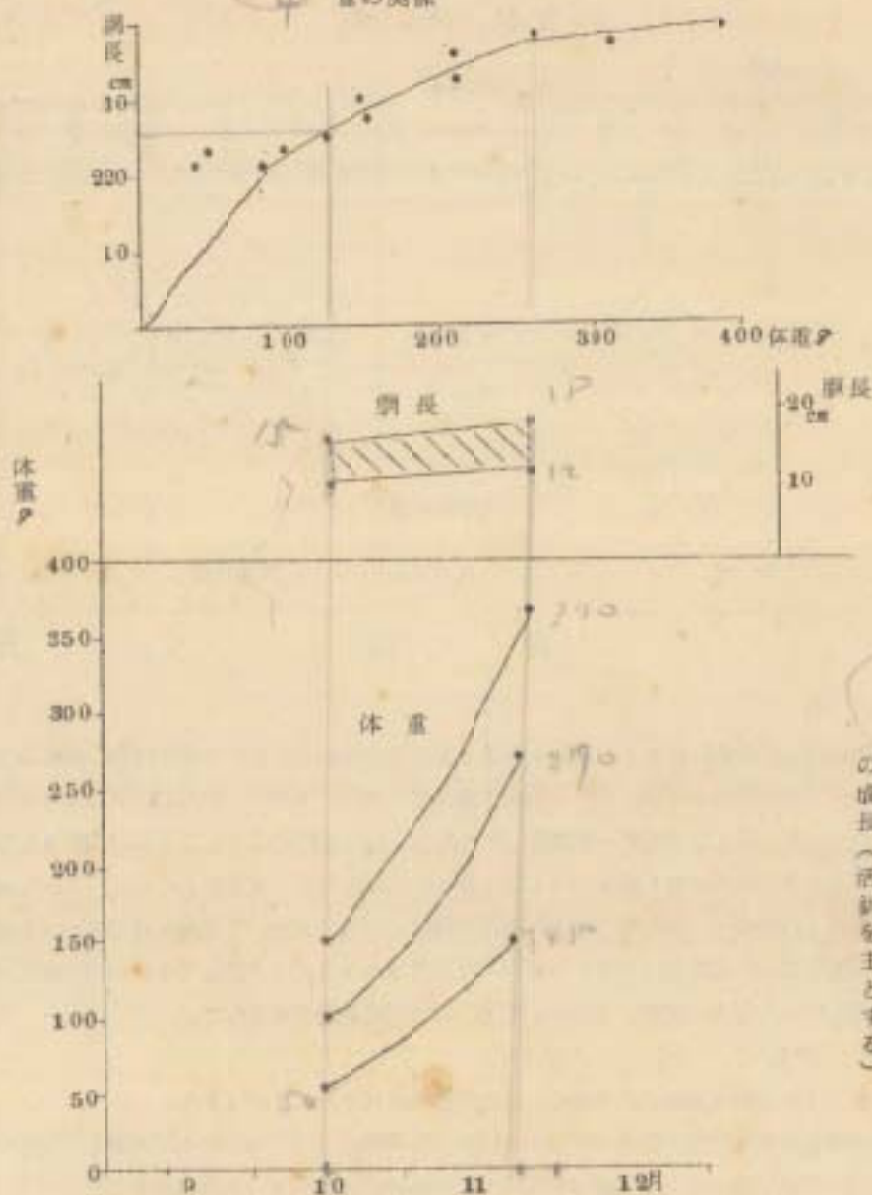
当初は海水に馴化したタイフピアを与えた後ゼラの稚魚を与えたが当初は捕食の動作は見られなかったが網に引れると網に投与と同時に捕食する動作が見受けられた。冷凍したキジナゴ、カリフィフシ等も与えたが一度捕食したものは手放し網底に沈下したものは見向きもしない状態であるから光餌は全く採らないものと思つて活餌のみを与えることにした。しかし餌料を与えることは網底その色の面で問題があり今回はこのことについて研究を続けて行く予定である。飼育期間中の成長量は極めて少ない飼育尾数であつたため測定してないが見た眼にはかなり成長しているように見受けられた。第4、第5図に成長度を示した。

V 要約と結論

1. アオライカの卵は輸送がたやすく、比較的簡単に集めることができる。
2. 自然状態のままでのフ化はシケ舟の遊動による網目が小さくないとよく考えられる従つて未熟仔のフ化が多いことが推測されるので繁殖保護も人為的なフ化手後は有効であろうと考えられる。

3. アオリイカの稚子の餌としてはアミとテナガエビのmysis 期のものが良い。その飼育方法も解明しなければならないが現在大量に飼育することはできないのでイカ卵を白濁時にも静かな自然海面の施設に収容し、フ化させ、集魚灯で集めたアミを給餌する方法が考えられる。
4. 活簀による方法は成長段階に応じて網目網目の大きいものにする必要がある。どの大きさでどれ位の網目にするか或いは市場サイズまでに何回換える必要があるかはまだ明かでない。

第六図：アオリイカの網長と体重の関係



第七図：活簀網中成長の十日間の成長率(活餌を主とする)

5. 活魚は一番簡便で汚物の附着或いは生物によつて目づまりをおこす。しかしながらアイゴを適量混入すれば目づまりをおこさない程度に掃除をしてくれる。
6. 小胡網の網目についてはどれだけの網にいくら収容できるかその限度は明らかにされていないが当社心配された網ズレ、イカが網に慣れることによつておこらないし小胡網による倒付は可能である。
7. 餌はアレビヤ、ボラ、ゴンズイ(クーガーイユ)、テンシクダイ(ウクミー)、スミメダイ(ヒョウ小)の活魚と冷凍キビナゴを与えたが死魚に対する摂餌反応は極めて悪く活魚なら底層性のボンゴ等を除いて表層を遊泳するものとはどんな種類のものでも捕食する。従つて集魚灯、その他の漁法で活魚としてとれるものを利用する必要がある。
8. アオリイカの捕獲に於ける産卵期については目下調査中であるが今までに特明した所によれば4月下旬ごろから11月中旬ごろまで産卵するようである。産卵盛期は7~8月であらう。